

セクシズムにおける接触仮説の検証

1180489 森岡勇氣

高知工科大学 マネジメント学部

1. 序論

セクシズムは、従来、男性の女性に対する否定的、差別的な態度や信念、行動として扱われてきた（阪井，2007）。しかし、「従来、偏見や差別の対象とされてきた人たちは、能力面でも人間性の面でも劣っていると見なされる集団に所属していることが多かった。フィスクらは、現代においては、この様な形の偏見や差別は減少し、代わって、両側面の評価が相反する内容を持つアンビバレント・ステレオタイプに基づいた偏見や差別が増大していると述べている（Fiske et al, 2002）。その典型はジェンダー・ステレオタイプにみることが出来る。」（池上，2012）とあるように、昨今では敵意的セクシズムと好意的セクシズムの二種類から成るアンビバレント・セクシズム（Glick, & Fiske, 1996）が提唱されている。

女性に対する敵意的セクシズムの構成要素としては、基本的に古典的なセクシズムと同様であり、能力や人間性の面で劣っているとみなす偏見や、否定的、差別的な態度や信念がある。さらに現代的な要素として、女性は何気ない物言いや行為をもとに、男性のことを性差別主義者と判断する、と男性が思うことなどのフェミニズム的態度への嫌悪感も含まれる。一方、女性に対する好意的セクシズムは、女性は清純で道徳的に優れ、男性にとって必要なものとみなす好意的な態

度や価値観のことをいう。

男性に対する敵意的セクシズムは、男性に対する否定的な態度や信念である。こちらは、男性優位な社会構造、信念に対する反発や反感に基づいている。逆に、男性優位であることを受け入れ、男性を必要な存在であるという価値観が男性に対する好意的セクシズムである（阪井，2007）。

セクシズムに限らず、差別的態度が低減する条件についての仮説として、接触仮説（Brown, 1995）が提唱されてきた。接触仮説とは、差別的態度は対象集団への無知から生じるため、集団との接触があれば、差別的態度は低減するだろう、という仮説である。しかし、『「接触仮説」の研究によれば、どのような種類の接触でも偏見や排外意識に影響を与えるというわけではなく、ある一定の条件を満たした接触でなければならない。その条件を満たした接触とは、まず接触をすることが政府や教育機関といった組織に積極的に支持されている必要があり（「社会的制度的な支持」）、接触が互いの関係性を発達させるのに十分な頻度、期間、および密度の濃さが必要とされ（「相互知悉性」）、互いが対等な地位関係にあり（「対等な地位関係」）、共通の目標をもつような共同作業を含む（「共同作業を含む」）というものである。これらの条件をすべて満たす必要があり、さらに言えば、このような条件を満たしていない接触は、外集団に対する偏見をかえって助長

される可能性があるという。事実欧米のいくつかの研究からも、接触が偏見を増大させることが報告されている（たとえば Sherif 1966 など）』（大槻, 2003）とあるように、単に町で見かける程度の接触では差別の低減にはつながらず、かえって差別を助長させる場合がある。本研究では、異性との接触のうち、「社会的制度的な支持」「相互知悉性」「対等な地位関係」「共同作業を含む」ものとして、「恋人関係」「友人関係」に焦点を当て調査した。

また、集団間の非対等関係を是とする個人の態度として社会的支配志向性 (Sidanius, & Pratto, 1999)がある。これは、人間は皆同じというわけではなく、どのような社会的範疇もしくは集団に属しているかによって貴賤の違いがあり、それに応じて処遇が異なることは道理にかなうとする思想や信条のことである (池上, 2012)。既存の社会構造を正当化する機能があることから、好意的セクシズムとの関連性がある可能性がある。

これら差別的態度に関連するであろう概念とセクシズムとの関連を調査することが本研究の主目的である。

2. 仮説

本研究では、異性との接触頻度を測定し、セクシズムとの相関をみることで接触仮説を検証することとした。また、敵意的セクシズムも好意的セクシズムも差別的態度であるため両セクシズム共に接触仮説が適用されるものと仮定した。仮説は、異性との接触頻度が高いと、性差別主義的な態度は低いだろう、である。

また、社会的支配志向性とセクシズムの相関をみることで、異性間格差を是と

する態度、価値観と集団間の格差を是とする態度、価値観との関連性を検証することとした。仮説は、社会的支配志向性が高いと、好意的セクシズムの数値は高いだろう、である。

3. 方法

実施日時

2017年10月、複数回に分けて実施した。

調査対象者

高知工科大学、高知県立大学の学生140名（男性80名、女性57名、未記入3名）であった。

調査方法

実験室にて社会科学実験という形で質問紙調査を実施した。

質問紙の内容

尺度は、ASI (Ambivalent Sexism Inventory) 日本語版 (宇井, 山本, 2001)、AMI (Ambivalent toward Men Inventory) 日本語版 (阪井, 2007)、SDO (Social Dominance Orientation) (Sidanius, & Pratto, 1999)、異性との接触頻度項目、以上の4つを使用した。

ASIは、男性が持つ、女性に対する敵意的セクシズムおよび好意的セクシズムを測定する尺度であり、0…非常に反対～5…非常に賛成の6件法で回答を求めた。敵意的セクシズムの尺度の例として、「ほとんどの女性は、何気ない物言いや行為をもとに、性差別主義者と判断する。」好意的セクシズムの尺度の例として、「女性は、男性から大事にされ、守られなければならない。」などが含まれていた。

AMIは、女性が持つ、男性に対する敵意的セクシズムおよび好意的セクシズム

を測定する尺度であり、0…非常に反対～5…非常に賛成の6件法で回答を求めた。敵意的セクシズムの尺度の例として、「男性は、女性と話すときに、いつも主導権を握ろうとする。」好意的セクシズムの尺度の例として、「どんな女性でも、自分のことを大切にしてくれる男性を必要としている。」などが含まれていた。

SDOは、社会的支配志向性の測定尺度であり、1…全く同意しない/反対する～7…完全に同意する/賛成するの7件法で回答を求めた。例として、「ある種の人たちは他の集団の人たちよりもいい扱いを受けるに値する。」「私たちは社会的平等を目指すべきである。」などが含まれていた。

異性との接触頻度項目は、今回の実験のために作成した尺度であり、「今現在、あなたに恋人はいますか。」「今現在、あなたが異性と話す頻度はどれくらい多いですか。」「今現在、あなたにはどれくらい多くの異性の友人がいますか。」「過去についてお聞きします。あなたが過去におつきあいしていた人はどれくらい多いですか。」の4項目がある。「今現在、あなたに恋人はいますか。」の項目については、1…いない～2…いるの2件法で回答を求めた。「今現在、あなたが異性と話す頻度はどれくらい多いですか。」「今現在、あなたにはどれくらい多くの異性の友人がいますか。」「過去についてお聞きします。あなたが過去におつきあいしていた人はどれくらい多いですか。」の3項目については、1…全くない、全くいない、全くいなかった～7…非常に多い、非常に多かったの7件法で

回答を求めた。

4. 結果

統計分析については全てHADを用いて行った(清水, 2017)。各要素の平均値、標準偏差を表1に示す。

先行研究(阪井, 2007)にならい男性の分析にはASI、女性の分析にはAMIを利用した。また、男女を分け両セクシズムおよびSDO、異性との接触頻度に対して相関分析を行った。結果は表2および表3に示す。

男性における好意的セクシズムは、恋人の有無と正の相関($r = .30, p < .01$)、異性と話す頻度と正の相関($r = .24, p < .05$)、過去に恋人がどれくらいいたかと正の相関($r = .37, p < .01$)が見られた。また、男性における敵意的セクシズムは、好意的セクシズムとの正の相関が見られた($r = .39, p < .01$)のみで他の項目との相関は見られなかった。男性の社会的支配志向性とは、異性と話す頻度が正の相関($r = .23, p < .05$)が見られた。

女性における好意的セクシズムは、異性の友人の数と正の相関($r = .33, p < .01$)が見られた。女性における敵意的セクシズムは、過去の恋人の数と正の相関($r = .30, p < .05$)、好意的セクシズムと正の相関($r = .44, p < .01$)が見られた。女性における社会的支配志向性は、他の項目との相関は見られなかった。

変数名	平均値	標準偏差
恋人の有無	1.30	0.46
話す頻度	3.79	1.80
異性の友人	3.34	1.59
過去の恋人	2.17	1.39
好意的asi	2.15	0.83
敵意的asi	2.31	0.76
好意的ami	2.23	0.89
敵意的ami	2.06	0.70
SDO	4.48	0.89

表1 それぞれの質問項目の平均値、標準偏差

	恋人の有無	話す頻度	異性の友人	過去の恋人	好意的asi	敵意的asi	SDO
恋人の有無	1.000						
話す頻度	.533 **	1.000					
異性の友人	.418 **	.746 **	1.000				
過去の恋人	.456 **	.493 **	.526 **	1.000			
好意的asi	.297 **	.241 *	.158	.369 **	1.000		
敵意的asi	.027	.047	-.101	.131	.386 **	1.000	
SDO	.152	.234 *	.192 +	.060	.193 +	-.134	1.000
	** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$						

表2 男性における異性との接触頻度項目と ASI および SDO の相関分析

	恋人の有無	話す頻度	異性の友人	過去の恋人	好意的ami	敵意的ami	SDO
恋人の有無	1.000						
話す頻度	.425 **	1.000					
異性の友人	.357 **	.624 **	1.000				
過去の恋人	.246 +	.115	.302 *	1.000			
好意的ami	.233 +	.085	.329 *	.259 +	1.000		
敵意的ami	-.007	-.065	.216	.305 *	.440 **	1.000	
SDO	-.067	-.163	.084	-.057	.011	-.100	1.000
	** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$						

表3 女性における異性との接触頻度項目と AMI および SDO の相関分析

5. 考察

結果から、異性との接触頻度が高いと、性差別主義的な態度は低いだろうとい

う仮説は支持されなかった。

この結果について、好意的セクシズムに関しては、女性にしても男性にしても好意

的セクシズムには異性を必要不可欠なものだと認識する機能がある為（阪井, 2007）、接触頻度、密度の濃さが高いほど、互いを必要な存在であると認識しやすくなるためではないかと考えられる。対して、敵意的セクシズムにおいては男女で少々異なった結果が出ている。男性においては他の項目との相関は存在せず、女性においては「過去の恋人の数」との正の相関を示したのみであった。これは、予測していなかった結果である。敵意的セクシズムには旧来の差別的態度が含まれているため、接触仮説が正しいと仮定すれば負の相関がみられるということ予測されたが、いずれにおいても負の相関は示されなかった。これについては、恋人関係、友人関係は「共同作業を含む」接触に該当しなかった可能性が考えられる。また、唯一正の相関を示した女性における「過去の恋人の数」との考察としては、女性においては過去の恋人関係が「社会的制度的な支持」「相互知悉性」「対等な地位関係」「共同作業を含む」接触のいずれかに該当せず、かえって差別的態度を助長させた可能性があるだろうと考えられる。

また、社会的支配志向性が高いと、好意的セクシズムの数値は高いだろうという仮説も、好意的セクシズムとの相関が見られなかったため支持されなかった。これは、SDOで記述されている集団に、異性集団が該当しないと回答者が判別した可能性や、異性集団の範囲が広すぎるゆえ、集団と認識されていない可能性があると考えられる。

今回の研究では、両仮説ともに支持されなかった。異性との接触頻度項目について

は、より具体的な接触内容の明記が必要であったというのが今回の反省点の一つであろう。接触仮説の適切な検証をしたうえでセクシズムとの関連性を検証する今後の研究に期待したい。

6. 参考文献

Brown, Rupert., 1995, *Prejudice: Its Social Psychology*, Blackwell. (=1999, 橋口捷久・黒川正流『偏見の社会心理』北大路書房.)

Glick, P., & Fiske, S. T. (1996). The ambivalent sexism inventory: Differentiating hostile and benevolent sexism. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 491-512

池上 知子 (2012). 格差と序列の心理学 ミネルヴァ書房 pp.2-4, 88-92.

大槻 茂実 (2003). 外国人接触と外国人意識 データによる接触仮説の再検討 日本版 General Social Surveys 研究論文集[5] JGSS で見た日本人の意識と行動 JGSS Research Series No.2

Sherif, M., 1966, *Group Conflict and Co-operation: Their social psychology*, London: *Routledge and Kegan Paul*.

Sidanius, J., & Pratto, F. (1999). *Social dominance: An intergroup theory of social hierarchy and oppression*. Cambridge, MA: *Cambridge University*

Press.

阪井 俊文 (2007). セクシズムと恋愛特製の関連性の検討 心理学研究, 78, 390-397

宇井美代子・山本真理子(2001).
Ambivalent Sexism Inventory (ASI)日本語版の信頼性と妥当性の検討 日本社会心理学学会第42回大会発表論文集, 300-301.